

河内屋  
茂兵衛様

一〇〔天保二年〕一〇月二二日

一筆致啓上候 追日赴寒冷候処 弥御安全珍重奉存候  
然ハ俠客傳壹之卷 壹番校合直し出来 二番校合すり  
本共被遣之 去ル十九日夕着御紙面之趣 御尤逐一致  
承知候 此節手前病人多く其上無人ニテ 尤取込罷在  
候へとも くり合せ早速式番校合いたし 今日飛脚問  
や嶋や佐右衛門方へ差出し申候 尤丁子屋に遣し 丁  
子やが差登せ候事順ニ候へとも 丁子やに人遣候とも  
飛脚屋へ人遣し候も 道のり同様ニテ いづれニも人  
足やとひ不申候てハ 持参の人も無之 幸便を待候て  
はおそなハリ 御急之間ニ合かね候間 いまた丁子や  
には幸便無之候故 不及案内 差急キ右之通り取斗申  
候 此段御承知可被成候

一〇〔天保二年〕一〇月二二日

一壹之卷 壹はん直し大てい直り候へとも 直し落 直  
しちかひ等 猶よほと有之 右しるしつけ候通り 入  
念御直させ 直り候ハ、 此式はん校合すり本御覧  
三番校合すり本可被遣候 よく直し候ハ、 大かたそ  
れニテ壹の巻は相済可申候 直し行届不申候てハ い  
つ迄も同様之義ニ御座候間 此段能々板木師へ被仰遣  
手おくれニ成不申候様いたし度候 尤直しなき処も不  
残すらせ可被遣候 とかく板とり扱ひ之節 カケ出来  
申候間 右改の為江戸板元ハ右之通りニ致させ候也  
何事も遠方之事ニテ 早速之間ニ合かね候 格別世話  
多く困り入申候 五巻共直し行届キ申候ハ、 当暮う  
り出しニ成可申候 直し行届不申候てハ 暮うり出し  
の間ニ合かね候 折角の事故何分大坂江戸共同時ニ暮  
うり出しニいたし度存 此節合巻著述最中ニ候へ共  
差置候て 如此速ニ校合いたし登せ候 此方少しも如  
才無之候 此段御遠察可被成候  
一江戸ニてもほりのあしきを 板木師仲間ニてよミ本ほ  
りと申候 是ハ安物のよミ本 中本至て下直ニほらせ

候故也 拙作杯ハ夫とちかひくどく候へとも 板木師  
共普通の安ほりのくせ有之候故 龜末ニいたし候事と  
被存候 江戸ニても吉十郎殿ほり杯ハ不宜 校合ニ毎  
度こまり候へとも 近所の事故 三番四番直し共 早  
速ニ間ニ合申候 御地のほり斗あしくて 江戸のほり  
よきにハあらねと 年々ほりニ板木師ハかねて心得居  
候故 少しハちかひ申候 釈迦ニ法問とやらに候へ共  
此段御心得の為得御意候也 いつれニも来春御出府可  
被成候 其節とくと御相談とり極メ愚意ニ落候ハ、  
俠客傳二編早速取かゝり可申候 当年まづ御手隙を見  
候迄ト存候て 実ハ差ひかへ候也 はたして此分ニて  
ハ末々永キ事 中々御とり引いたしかたく候 くれ  
／＼も此段あしからず御勘考可被成候

一校合すり本 此方へ直ニ被遣候事 差またき不申候  
よろしく候へ共 丁平何とか存候事も可有之哉ト存候  
彼方ニても交易之事故 あつく世話いたし候様子ニ候  
間 たとへ校合すり此方ニ直々被遣候とも 其節ニ平  
兵衛殿へも御案内状被遣可然被存候 末々永キ事故仲

間われ不致様ニと寸志申述候 是又御如才あるましく  
候へとも 為念如此御座候 早々已上

十月廿二日

篁民

河内屋

茂兵衛様

一一「天保二年」(一〇月二二日)(追啓)

〔紙背・別筆〕

十月廿二日出

此書状後先

追啓

一 水滸四傳全書 并ニ三才発秘直段之事 御問合せ申候  
処 御しらせ被下 忝奉存候 二 水滸傳全書は同様之直  
段ニて 先月中外素人ハかひ取申候 三 三才発秘は 先  
年松坂殿村氏にも頼置候処 此節名古屋や松坂書林へ  
参候よしニて 右三才発秘かひ取差越し申候 然ル処